



羅針盤

2015年度 第18号
都立豊多摩高等学校
進路図書部

Geistesaristokrat

2016 (平成28) 年2月4日発行

ロボット工学者石黒浩は、生きる価値を探していれば、なれるもんになると考えたし（『羅針盤』第13号）、スティーブ・ジョブズは「もし今日が人生最後の日としたら…」と自問した（『羅針盤』第15号）。どちらも「やりたいこと」を見出す手がかりになるだろう。が、強引な点で、ギデンズやベックの案に似ている。彼らは『目指すべきもの』が、実際は自分の内にしか存在し得ないことを自覚し、その上で「あえて」そうした目標や理念を選び直さなければならない」と考えた。『徒然草』第188段の「いづれかまさるとよく思ひくらべて、第一の事を案じ定めて、そのほかは思ひすてて、一事を励むべし」と同じ路線であろう。が、鈴木謙介は、情報が氾濫するカーニバル社会で、その力業は不可能という。

それでは、私たちは、自我を不安定にされながら、どうすれば「やりたいこと」を見つけ出せるのか。

「やりたいこと」を探すには…—感染と模倣—

宮台真司が、『14歳からの社会学—これからの社会を生きる君に—』（ちくま文庫、2013）で、糸口になりそうなことに触れている（132～152頁）。「やりたいこと」ではない。「学ぶ動機」を3つに整理しているのである。

競争動機（勝つ喜び）

理解動機（わかる喜び）

感染動機

（同書、136頁）

宮台によれば、「周りの子とテストの点数を競い合うとか、人よりも高い偏差値の学校に合格したいと思っ
て勉強する」のが「競争動機」で、「自分の力で問題が解けた」「自分の考えをうまく説明できた」と感じる
喜びが「理解動機」である。前者が外発的、後者が内発的と考えられるから、「理解動機」のほうがより持
続的・根源的な動機であり、高い目標に必要な動機づけである。学問や知識の究極的な価値が「真理」の追
究にあるとすれば、間違いではないはずである。が、3番めの「感染動機」によって学んだことこそ「一番
身になる」という。誰かを直感で「スゴイ」と思い、「自分もこういうスゴイ人になってみたい」と思う感
覚である。その結果、身ぶりや手ぶり、しゃべり方まで真似することになる。

宮台の感染対象は、中学時代には勉強以外に「プラスアルファ」のある先輩であり、大学進学後は、^{ひろまつわたる}廣松 渉
や小室直樹、ノーム・チョムスキーという学者であった。先輩の話を理解するために^{たくさん}沢山の書物を読み、感
服した学者を見習い、「あの人がいたら世界をどう見るのか」とシミュレーションしたという。

彼は、「競争動機」も「理解動機」も、喜びの瞬間を求めて奮起するものだけれど、「感染動機」は、感染
している間がすべて喜びになると指摘する。「だから『感染動機』が最も強い『内発性』を与える」。

スゴイ人に^{もほう}感染して模倣することが「やりたいこと」であるということになる。真似や模倣の奨励になる
から、独自性に拘る人には抵抗感があるかもしれない。が、独自性の確立にとって模倣は必要案件である。
「学ぶ」の語源は「まねぶ」だし、アリストテレスは、芸術の根幹は模倣にあると考えたし、ルネ・ジラ
ールは、人間の社会的欲望は「多くの場合、他者の欲望の模倣という形をとる」と言った（中山元『高校生のため
の評論キーワード100』（ちくま新書、2005）の「模倣（ミメシス）」「欲望」の項）。随分前、NHKの「プロフェッショナル
」で、一流のパティシエを招いたとき、最後にMCの^{もぎ}茂木健一郎が「新作オリジナルはどうやって考案す
るんですか」と聞くと、ゲストは「知ってる味と知ってる味の組み合わせです」と応えた。模倣と模倣である。
茂木はすかさず「脳の仕組みと同じです！」と快哉を叫んだ。

また、秀でた人物は、優れた感染者を残すようである。

『朝日新聞』に^{ふかしろじゅんろう}深代 惇郎という名作家がいた。「天声人語」を担当し、46歳で亡くなった。早世である。
その看板コラムは出版され、読み継がれている。後輩の^{くつわたたかふみ}久保田誠一や^{しんざん}豊田隆史は、文章に呻吟すると、「深

代さんならどう考えただろう…」「どのような形容を使って書いたらだろう…」とよく考えるという（後藤正治『天人—深代惇郎と新聞の時代—』（講談社、2014）217、235頁）。

現代思想の内田 樹^{たつる}は、27歳で夭逝^{ようせい}した畏友^{いゆう}をしばしば思い出す。同時代日本人の中で最高の知性と確信する友であった。略述することなどできない。2人の亡友について叙したその一編は、内田の文章の中で最も美しい。彼はしばしば、その得難い友人を思い出し「もし、新井君がいたら、この仕事をどう評価するだろう？」「もし、新井君だったら、こういう場面でどういう判断を下すだろう？」と自問するという（内田樹『街場の大学論—ウチダ式教育再生—』（角川文庫、2010）249頁）。同断といえるだろう。

対象は、実在人物とは限らない。一線級で活躍する地震学者や火山学者の中には、小松左京の小説『日本沈没』（光文社、1973）や映画化作品（1973）に触れ、登場する科学者に感染してその道を志した人が少なくない。さだまさしの「風に立つライオン」（1987）は、実在のケニアの日本人医師に取材した歌であるが、この曲に啓発されて、アフリカで医療に携わっている日本人が何人もいる。どちらも、テレビの特集番組で知った話である。

自分にとってのスゴイ人なら見つかるのではないだろうか。それは、自分の内にしか存在し得ない「目指すべきもの」を、スゴイ人という第三者を媒介させて相対化し、見つけやすくする方法である。君にとってのスゴイ人を見つけ、「自分もこういうスゴイ人になりたい」と思い込めば、内発的な目的が手に入る。それを実行すること、模倣することが、君の「やりたいこと」である。

本を読み、人と出会い、君のスゴイ人を探し出そう。感染しよう。そして、模倣しよう。

出会いとあいさつ

新聞の投書欄から

○さわやかな少年との出会い

無職 菅○ ○子 87（山形県鶴岡市）

北風に小雪が舞う土曜日の昼近くのことでした。近所の交差点付近で、男子中学生が「こんにちは」と、明るく声をかけてくれました。

私も即座に答えました。「今日も授業ですか」。少年は「野球部の部活です」と話しました。続けて、私が「何年生」と聞くと、「1年生です」と答えてくれました。私が「お声をかけてくださってありがとうございます」とお礼を言うと、少年ははにかみながらも笑顔を見せてくれました。さわやかな少年との出会いに恵まれたことに、心が温かくなりました。

少年には、見知らぬ私に声をかけ、心の窓を開くゆとりがあったのでしょう。広い歩幅で、少年は立ち去りました。後方から、遠ざかる少年の後ろ姿を追いながら、私も歩みを進めました。少年は、おだやかな家庭で伸びやかに育っているだろうと推測しつつ、偶然の出会いに感謝しました。

（「毎日新聞」2016年1月24日朝刊）

豊多摩の学友も、先生や生徒同士だけでなく、初対面の来校者にもあいさつをしてくれる。天下一品である。教職員同士で話題に及ぶと「今まで経験した学校では1番」という結論に落ち着する。投書は、あいさつをされた大人たちがどんな気持ちになるかを教えてくれる。

入試対策の模擬面接で「出身校を紹介してください」と聞くと、たいていは「自主自律の高校です」と応える。が、「自主自律」を謳^{うた}う高校は多い。しかも、抽象的である。独自性は説明できない。想像力のある面接官なら、学校案内を見て用意した応答だと思うだろう。

「…来校者にあいさつをほめられる高校です」と付け加えたらどうだろう。指導されてできるレベルではない。自主自律の具現である。しかも、母校を誇りに思う気持ちまで伝えられる。想像力のある面接官なら補足説明を求めるだろう。君の説明から、自分が訪問する光景を想像するだろう。引用の投稿者同様、心が温かくなるに違いない。

「花が沢山咲いている高校です」にも同じような効果がある。想像力のある面接官は、君の補足説明から、年長の卒業生が持ち出しで花を植えに来てくれる学校に思いを馳^はせることになる。卒業生が母校を愛し、現役生が感謝を言葉にして、それが循環する関係を思い浮かべることだろう。